

小島勝治文献目録

佛教大学社会福祉学研究室

目次

凡例

筆名目録

寄稿雑誌一覧

著作編輯目録

著作集

凡例

1 昭和六年、わたしが十八歳ではじめて世間に文を問うてから、皇紀二千六百年をむかへた今年は、恰度十年目にあたつてゐる。筆の生活は苦闘であり、めぐまれぬことの方が多かったが、数々かいていったものゝ目録を配列するだけで、わたくしの嗜好のおもむくところを、おのづから指向してゐるようだ。日記をたまにしかつけないこの身には、こんなにつまらない労力でもしておいて、苦闘のうちに今日をつくつたおもひでを、忘却から救はうとするのは、まだ若いわたくしには必要であらう。

2 民俗学、統計学、社会科学と、よくこれだけの漫遊を短時日のあひだにしたものだとおもふ。しかもその一日の記憶を、つねに綜合して役立たせよう

と、これも亦いらぬ思ひつきと未練から、人からは飽き飽きされるような正体を、わたくしの学問と主張してきた。来年、二十八歳でこの結末をどうにかつけようとは、かつて旧友にしばしば語つたところである。その目鼻もさはいはいに今はついてきた。

3 目録の記述の順序は年月順であつて、

題名〔筆名〕

掲載誌 頁数（アラビア数字） 巻号

上部の符号は（著）は著書、（編）は編輯物、（講）は講演または講義、（談）は談話または研究報告、（座）は座談会の速記を示してゐる。但し座談会だけは速記録の公刊されたものだけを登載した。

昭和十五年七月三十一日

小島勝治

筆名目録

赤井義雄 荒川美之助

釋 迢風

市丸 蔚

田所勢二

太田正穂 尾上芳雄

梶光三郎

柘植範彦 津酒國舎

闘鶏庵主人 とらのや

規矩純勢

木村よね

中石清一

楠華堂主人

楠畑 鋏

生之手信一

鼠小僧忠助

芥子久朗

芥子久一郎

林 すみ子

林 傳一

胡内藻助

小山純彦

本莊 茂

桜木日出男

松本彦一

御宮司芳文

御宮司好文

御宮司好三郎

御津弥一郎

女部田仁平

米村楠海

立藤武助

寄稿雑誌一覧

民俗学

近畿民俗

近畿民俗学会発行 太田陸郎編

昔話研究

壬生書院発行 関敬吾編

民間傳承

民間傳承の会発行

ミネルバ

翰林書房発行 甲野勇編

旅と傳説

三元社発行 萩原正徳編 昭一五・四より後藤興善編

大阪民俗談話会報 同会発行 宮本常一編 昭一一・五改巻して三

号まで横井照秀編昭一五・一より沢田四郎作編

(自編)

昔

古代生活研究会発行 土と史の改題

古代生活研究会々報

同会発行

古代学報

古代生活研究会発行 同会々報の改題

統計学

統計学雑誌

統計学社発行

浪華の鏡

大阪府統計協会発行 土井五六七編 昭一一・八よ

り松野竹雄編

(自編)

大阪統計談話会々報 大阪統計談話会発行

統計研究

大阪統計談話会発行 同会々報の改題

こうして並べてみると三十六のペンネームがあるが、大部分は「土と史」、「昔」をほとんど単独執筆してゐたころのもので、その後は釋迢風を随筆に、立藤武助を統計実務論につかつたのが相当多く、最近ではほとんどつかつてゐない。この他、中学校時代には「風羅久」といふペンネームがあつたが、公刊物にはつかはなかつた。書道、篆刻の雅号には「楠華」「楠峰」「柴山」などをつかつたことがある。

社会政策・社会事業

協調会大阪支所月報 協調会大阪支所発行 井上正雄編

社会福利 東京府社会事業協会発行 金光史朗編

(自編)

社会事業論叢 弘済会発行 弘済会報の改題 昭一五・一創刊

随筆

上方郷土研究会発行 南木芳太郎編

若葉

(自編)

土と史 土と史の会発行

在学時代

校友会々報 浪速中学校々友会発行

神道学会月報 神宮皇学館神道学会発行

寮 神宮皇学館精華寮発行

桜門学報 日本大学専門学校学友会発行

文芸部報 日本大学専門学校文芸部発行

(自編)

三稜鏡

おとづれ キリン会発行 広瀬編

会報 浪速中学校同窓会発行

(自編)

かなへ ようねん会発行

其他

書道時代 松田雪州編 書道雑誌

布施市公報 布施市役所発行

布施町報 布施町役場発行

布施 布施商工会議所発行

布施市自治研究会報 同会発行

大大阪 大阪都市協会発行

新聞

大阪毎日新聞

大阪朝日新聞

書物新潮 書物新潮社発行 栗田春雄編

こうしてならべると他人の雑誌と新聞が二十八種、自分の編輯したものが九種ある。民俗学のもののかいた頃は毎号かわつたものにかくのが趣味だったが、だんだん雑誌のえりごみをするようになり、最近では「浪華の鏡」にかたまつたような恰好である。

著作編輯目録

昭和六年 (一八歳) 1931 2591

四月

投稿? 書道時代 一―四

書家松田雪州編の書道雑誌に投稿したもので論題失念、とに角わたくしの処女作である。

十二月

随感記(愛の必要)

浪速中学校校友会
会報 3 二五

三月書道を断念して浪速中学に入学する、六月赤井義雄と相しり毎日歴史を談ずる、新聞記者になろうとする志望つよし、二月に下の姉結婚。

昭和七年 (一九歳)

1932 2592

七月

ワシントン公を偲ぶ

ワシントン誕生
三百年記念文集

米國政府よりの懸賞論文に入選したものであるが刊行物の年月は不明、原稿は保存してある。

(稿)新体日本古代史

稿本全六冊

この頃より九月までの休暇を利用してかいた論文、これがわたくしの学的研究のはじめであつた。

十二月

御親闊式記

浪速中学校校友会
会報 2 二六

伊勢大廟奉拝記

〃 3 二六

芥子久一良と相しる、赤井にすゝめられて伊勢にゆくことにする、七月より古代史を研究しはじめる。

昭和八年 (二〇歳)

1933 2593

三月

御親闊式記

御親闊感想録 3 大阪府学務部発行

四月

中澤会結成御挨拶

おとづれ 4 一

中沢賢道先生の教へ子の集りのためにつくつたキリン会の会誌、創刊の辞である。

十月

(編)三稜鏡 第一号 半紙

神宮皇学館同人雑誌、藤田準三と共編、二号を出したことは記憶にあるが三号は不明である。

御挨拶として

三稜鏡 一

田丸城址遊行の記

〃 一

金と國史

〃 一

(稿)日本古代研究―出雲神話の解釈

稿本 一冊

古代史の研究は本格的にすゝめられた、この頃より十二月までの間にかいた原稿である。

十二月

(編)三稜鏡 第二号

半紙

不明?

三稜鏡 二

三月中学校を卒業し、赤井天王寺師範に入り、四月ひとりで伊勢にゆく、勝又朝頼先生にあひ科学の研究をすゝめられる、古代史に専念した、十月藤田準三と相しる。

昭和九年 (二一歳)

1934 2594

一月

(稿)日本古代史観

稿本 一冊

この頃から三月までの研究をあつめた。

二 月

(稿) 日韓古史断攷証

稿本 一冊

三 月

(稿) 日本古代史研究録

稿本 一冊

四 月

(稿) 日本古代史稿

稿本 一冊

この頃から六月までの研究をあつめた。

五 月

(講) 國史学講究の目的

神宮皇学館神道学会

27日

処女講演である。

(談) 皇祖神の性に関する問題

神宮皇学館神道部会第二回例会

わたくしの創立した会である。

六 月

(講) 神宮正統記講義及び私見

神宮皇学館神道部会第三・四回

波うつ思ひに (一)

神宮皇学館神道学会月報第二号

國史学講究の目的の速記文

七 月

波うつ思ひに (二・未完)

神宮皇学館神道学会月報第三号

志摩古代史論?

発表誌、題名不明

鼠の物語り「鼠小僧忠助」

寮 2 六

八 月

(稿) 山と想

稿本 一冊

隨筆集の原稿、これについて杜のことほぎ、七の宮からなど数部がある、いづれも未発表。

十 月

(稿) 杜のことほぎ

稿本 一冊

十一 月

(稿) 撰陽古史攷

稿本 二冊

五月折口信夫、中山太郎の書物、津田左右吉の書物をよみ、民俗学に興をもつ、七月業をへて宮つとめに入る、このあひだ隨筆をかきあらし、さびしく民俗書をぼつぼつよむ、友はだんだんはなれていつた、最初に入つたのは難波八坂神社で八月二十五日から三日間、三日目に五条宮へ転じた、九月大風がおこる、この秋、内田勇助先生、川浦光重先生をうしなふ。

昭和十年 (一一二歳)

1935 2595

(稿) 日本古代史総論—大倭宮廷序論—

稿本 一冊

この年一月から三月頃の執筆。

二 月

(稿) 小説寂 入

宮つとめのさびしい生活記録である。

(編) 土と史 第一号 四六 頁

五條宮に神職たりし頃の同人雜誌、同人に藤田準三、赤井義雄その他の数人あり、第四号を出して昔と改題した。

こしらへてから—土と史創刊の辞— 土と史 2 一

だらのあんまの昔ばなしの註釈 土と史 2 一

凡人の浄土〔津迺國舎〕

倭人の貫頭衣ちふ着物

恵多発生縁起序論—恵多名義考—

咒符〔桜木日出男〕

民俗神道学随筆—神通力にて火を消すこと〔楠華堂主人〕

〃 4

土と史を発売、謄写版刷の小冊であつたがうれしかつた。十日戎の日に謄写版をかつてかへつたのである。丁度わたしの一ヶ月の給料でまだたりなかつた、この第一号は相当出た、山の友だちが買つてくれたが、世話をしてくれた肥後のある人が金を全部着腹してしまつた、祈年祭を了へて宮つとめをやめた。

三 月

(稿)七の宮から

稿本 一冊

一月中ぶら／＼と失業してゐた、どうにかなると職をさがしもしなかつた、この一月に古代史の基礎的なかんがへをまとめることができたが、姉は早く職につけといふ、月末布施の職業紹介所の門をくゞつた。

四 月

(編)土と史 第二号 四六頁

軍人氣質・金持意識(一)〔立藤武助〕土と史 3 二

芥子といふ名字〔芥子久朗〕〃 2

盗人の神道的発生—民俗神道学随筆〔楠華堂主人〕〃 4

資料お尻のいたづら

馬肉食はざること〔市丸蔚〕

古典のくに・志摩〔林すみ子〕

(稿)國史の発生

稿本 一冊

四月布施町役場に入り、俗吏の生活がこゝにはじまつた、職業紹介所の世話で、つてがなかつたから日給八十銭、戸籍係で酷使された、ちつところへて五月兵事係に、七月議事係に邪魔ものゝように転々とし、十一月に統計係におちついた、このとき日給九十銭加藤樂二、有馬恭一などいふ貪慾、慥猛な上吏があた。

六 月

(編)土と史 第三号

なにわのてふり—佛教渡来史の一面〔楠華堂主人〕

土と史 5 三

上代日本に於けるユーウーテーの考察〔太田正穂〕

〃 10 三

空箇物語—骨かじりの話、迷信観〔楠畑生〕

〃 1 三

あるまじない師の話〔胡内藻助〕

〃 4 三

軍人氣質・金持意識(二・完)〔立藤武助〕

〃 2 三

芥子といふ名字追補〔松本彦一〕

〃 〃 三

神と盗み〔林傳一〕

〃 〃 三

女陰の呪力〔小山純彦〕

串刺ちふ天津つみ〔田所勢二〕 土と史 三
 後の考証家困しむこと〔御官司好文〕 〃 三

紙魚を愛する―その二〔とらのや〕 〃 2 三

八月

(編)土と史 第四号

この号から同人雑誌を民俗雑誌として学界にひろく頒布した。

生活史学に生きる道 土と史 3 四

箸神放 〃 5 四

日本上代相統法の一面(ユウウターの考察その二)〔太田正穂〕 〃 6 四

俗信・方言 〃 1 四

難波近在乞食袋(一) 〃 〃 四

大寺さんの雷 〃 〃 四

無言のお稻荷さん〔御津弥一郎〕 〃 〃 四

神興あばれること〔御津弥一郎〕 土と史 〃 〃 四

お札のふつた話 〃 〃 四

狐の死んだ話〔歛之手信一〕 〃 〃 四

三くだり半の石段〔小山純彦〕 〃 〃 四

深江笠〔林すみ子〕 〃 〃 四

新喜多の塞の神〔林すみ子〕 〃 〃 四

蛇の咒言〔小山純彦〕 〃 〃 四

田のかゞし其他〔荒川美之助〕 〃 〃 四

花かんざしを奪ふこと〔木村よね〕 〃 〃 四
 夢占の資料〔立藤武助〕 〃 〃 3 四

だいがくを觀る〔楠華堂主人〕 土と史 〃 〃 2 四

あだうち療法〔女部田仁平〕 〃 〃 〃 四

しこるといふ方言〔赤井義雄〕 〃 〃 〃 四

蓮花開音〔林傳七〕 〃 〃 〃 四

ごぶりといふ語〔胡内生〕 〃 〃 〃 四

泣き女について〔楠華堂主人〕 〃 〃 2 四

柳田國男先生の還暦記念に民間伝承の会が設立され、沢田四郎作先生の紹介で入会した。

十月

遠方の方々に〔立藤武助〕 土と史終刊の辞半紙一枚

(編)古代生活研究会報

特輯三号、会報八号まで出して古代学報と解題した、赤井義雄、芥子久一良との研究連絡機関誌。頁数発行月日次のとおりである。

特輯一	42	一〇	三	27	二・一	八	22	六・一
二	14	一〇	四	10	二・二			
三	17	一一	五	20	三・一			
会報一	17	一二・一	六	17	四・一			
二	28	一一・一	七	29	五・一			
十一月								

女陰の呪力〔小山純彦〕 古代生活研究会報1 特三

神と裸女〔釈迢風〕 〃 2 特三

割礼に關係して〔釈迢風〕 〃 4 特三

案山子図譜〔釈迢風〕 〃 2 特三

レビューの発生〔釈迢風〕 〃 5 特三

(編)昔 第一号

土と史の改題、民俗雑誌として再生し赤井義雄と共編。

盗人職の神道の発生 昔 15 一

箸の神〔赤井義雄〕 昔 一

石切さんのお先使ひ〔林すみ子〕 〃 一

日中狐に化された譚〔楠華堂主人〕 〃 一

狸地藏に化けて盗人を迹ふ譚 〃 一

狸鰯をもつて挨拶に来る譚 〃 一

月見の俗信〔小山純彦〕 〃 一

人魂家に入りて盗児を生む譚〔立藤武助〕 〃 一

北向きの神〔御官司好文〕 〃 一

神の足音〔御官司好文〕 〃 一

節分の鬼と福〔御官司好文〕 〃 一

むげつしやな・神輿あばれること 昔 一

塞の神のゆくへ〔林すみ子〕 〃 一

大阪民俗談話会にはじめて出席して杉浦瓢、宮本常一にあふ、沢田博士の知遇をうる。

十二月

古代研究会々報発刊の趣旨〔釈迢風〕

古代生活研究会報第一号の二

民俗学の現状と古代研究の行くべき道〔釈迢風〕

第二号の二

昭和十一年 (二三歳)

一月

(編)昔 第二号

都市と職人筋 昔 3 二

河内を名とする渡りもの〔立藤武助〕 〃 3 二

河内高井田村俗信〔御官司好三郎〕 〃 二

猫つき婆さんの話〔立藤武助〕 〃 二

米をとぐ狸の話〔立藤武助〕 〃 二

人形の生きてくる話〔立藤武助〕 〃 二

いたづら狸〔立藤武助〕 〃 二

茶の湯の墓〔立藤武助〕 昔 二

天白さんのことゝも (一)〔楠華堂主人〕 〃 2 二

生國魂神社の無責任 大阪毎日新聞 7日

経営一ヶ年の回顧と民俗学界の動静〔釈迢風〕

古代生活研究会報第二号 2

近畿民俗学会を設立、群小雑誌発刊の機運となる、柳田先生にはじ

めてあふ。

二月

堺の民間神と信仰断片

近畿民俗 2 一一一

(講)河内の職人調査

大阪民俗談話会第15回 23日

河内の職人調査

大阪毎日新聞 25日

まゝ子とほん子の話

昔話研究 1 一一〇

夜店と民俗学〔釈迺風〕

古代生活研究会報第三号 1

堺の手毬唄

第三号 5

民俗学の行くべき道 (秘かに時期を待つ仕事)

第三号 3

会報の使命〔釈迺風〕

第四号 1

三月

(談)まりを作る話

大阪民俗談話会 16回 8日

神迎へ形式とその信仰〔釈迺風〕

古代生活研究会報第五号 2

傍示民俗資料〔立藤武助〕

2 3

山村調査について〔釈迺風〕

2

統計と世相の学 (一)

浪華の鏡 一一三

浪華の鏡にはじめて論文をだした、これが縁でいまもくされ縁をつ

づけてゐる。

四月

統計と世相の学 (二)

浪華の鏡 一一四

便所・床屋の看板

民間伝承 一一八

河内國宮座調〔楠華堂主人〕

古代生活研究会報第六号 1

ほりやの話

近畿民俗 5

一一二

亀と酒

ミネルバ 1

一一三

(編)昔 第三号

この号にて以後自然廃刊となる、近畿民俗の創刊により大阪地方の民俗雑誌であつた兵庫県民俗資料、口承文学、田舎など、共に、柳田先生のすゝめにより廃刊した。

宮座の葉 (中河内郡の一)〔楠華堂主人〕

昔 4 三

住吉のこつくりさん〔芥子久一朗〕

1 三

蛇と娘〔立藤武助〕

三

ちようづの神〔林すみ子〕

三

正月の食物〔御宮司好三郎〕

三

婚姻習俗〔芥子久朗〕

三

産育婚葬俗信抄〔赤井義雄共編〕

三

中河内郡民俗誌資料

三

まりを作る話

三

職人雑報 (火方・入れ墨)〔米村楠海、梶光三郎、小山純彦、

尾上芳雄〕

三

童唄・童遊〔赤井、芥子共編〕

昔 2 三

手毬唄〔林すみ子〕

三

深井村再生計畫に就いて―批評と紹介

2 三

古代生活研究会報休刊の辞

古代生活研究会報第8号 2

釈迢風著作年表（昭和十一年六月末日現在）

〃 1

日大専門学校商科に入学する、この月日給一円となる、藤田智正、岡本栄一など、奔走してようねん会をつくる、雑誌「かなへ」はこの機関誌であつた。

五 月

管内労働事情調査―批評と紹介 古代生活研究会報第七号2

〃 第七号2

六月一日の行事

民間傳承 一―九

傍示村の神とてつたい

旅と傳説2 九―五

まぶいてめ

平子先生記念会発会案内檄文6

六 月

農村年中行事断片（二）

近畿民俗 一―三

（編）かなへ 第一号

平子鼎先生を記念する教へ子のあつまりである、会はずゝいたが雑誌第一号で休刊となつた。

酒を飲む話（「釈迢風」）

かなへ 5 一

編輯覚書―阿倍野ヶ原の夕闇

〃 2 一

大阪市外布施町附近の氏子総代について

大阪民俗談話会報第2号

七 月

住吉の芥子ちふ家名

上 方1 六七

これに対し後藤捷一の「芥子ちふ示字に就て」が上方六八号によ

せられた。

職人調査についてお願い
床屋のてみせ

（談）棉作の話

八 月

農村年中行事断片（二）

近畿民俗 一―四

てのこぼ・こゝろみ

〃 1 一―四

かざ・豆占

〃 1 一―四

大阪の火方道具

旅と傳説1 九―八

両墓制資料―近江蒲生郡馬淵村

ミネルバ1 一―六

單位のはなし（「釈迢風」）

浪華の鏡3 一―八

天災の俗信

天災予知集所収

芥子久一良と奥吉野に旅行する、伊藤樂堂先生とあひ意見の対立はこのときからあつた。

九 月

（編）古代学報

古代生活研究会報の改題、第三号にて解散した。

第一号 5 九・一

第二号 5 一〇・一

第三号 14 一一・一

昔休刊の辞

古代学報3 一

発刊の事情

〃 2 一

深江笠の話

上 方2 六九

上方自慢号

職人の股引

大阪朝日新聞 24日

無意味な感情の対立をやめよ

〃 17日

懐しい言葉

桜門学報3

(講)職人習俗の採集について

日本民俗学講習会 26日

棉作の話

大阪民俗談話会報 三

日本民俗学講習会を連続二十五回の計畫で大阪懷徳堂にてひらく、

第一回に柳田先生をむかへ、第二回にはわたしと大間知馬三の講演

があつた、このわたしの話について伊藤樂堂先生と正面衝突をした、

ために一切の民俗学会を退会する心はこのときにごいてゐた。

十月

屋号

民間傳承 二一二

笠祭り

〃 二一二

奥吉野行

旅と傳説6 九一〇

写真三葉は芥子久一良撮影

盲人の象探り〔闘鶏庵主人〕

浪華の鏡3 一一一〇

職人の町と農業(上)

〃 一一一〇

赤井にすゝめて試験をうけさせる。

十一月

職人の町と農業(中)

浪華の鏡 一一一一

俗信と統計

〃 5 一一一一

十二月

職人の町と農業(下)

浪華の鏡 一一一二

宮座覚書

近畿民俗13 一一六

ぶとくすべ

〃 1 一一六

一切の民俗学会を退く、論文も「宮座覚書」が最後のものではつた。

昭和十二年 (二四歳)

1937 2597

一月

門松の話〔釈道風〕

浪華の鏡3 二一一

二月

職人の特權

民間傳承 二一六

髮結職由緒の傳説

旅と傳説5 一〇一二

節分の鬼

浪華の鏡3 二一二

三月

上方町人雑感

上方4 七五

元旦試筆

女中の出替り

浪華の鏡4 二一三

四月

四月馬鹿

浪華の鏡3 二一四

布施市となり書記補月俸三十一円、しかしこの頃から統計事務の實質上のしごとはもつぱらわたしがおこなつたのである、ために布施の統計は全國有数の地位をつくることのできた、しかしつての重視と、年かきな老人のはびこりとはかなしかつた。

五月

中の簞入り

浪華の鏡3 二一五

統計学専攻をおもひたつ。

六月

喪中の忌み

異人の行列

キリン会ちふ凡人の会

河太郎祭

(談)文書史料と傳承資料

土井五六七、松野竹雄と相しる、鈴木勇太郎翁につき駕屋および大名行列の調査をはじめ。

七月

出世魚など

幽霊とお化け

月俸三十六円になる。

八月

大津脚絆と江戸脚絆

飢と漬菜と親父教育〔闘鶏庵主人〕

山の巡禮〔釈迺風〕

九月

上田長太郎氏著「大阪の夏祭」

愛酒デー

(著)布施町誌 続編

(著)高井田村誌

(編)昭和十二年版布施市勢要覧〔高田志磨太郎共編〕

横井赤城と郷土調査論について論争。

十月

郷土研究と大量觀察

帽子の話

十一月

かんちの神とさんばいさん〔釈迺風〕

十二月

郷土調査の民族史的意義

薪と餅〔釈迺風〕

(稿)布施市制記念誌

原稿のまゝ、布施市役所に保存。

昭和十三年 (二五歳)

一月

元旦朝賀〔柘植範彦〕

新興布施市産業政策の基礎

この元旦から病をえる、四月ごろまでつく。

二月

三角寛氏著「掟」を読む〔柘植範彦〕

河内棉作調覧書

虎の石と虎御前〔釈迺風〕

元旦試筆

浪華の鏡 8

二一〇

〃 6

二一〇

浪華の鏡 3

二一一

浪華の鏡 10

二一二

〃 3

二一二

1938 2598

浪華の鏡 4

三一

新聞?

〃

〃

〃

書物新潮 1

一一六

上方(河内研究号) 7八六

浪華の鏡 3

三一二

郷土研究上に於ける都市調査の地位

〃 8 三一—二

〔談〕町鍛冶のはなし

大阪民俗談話会 32 回 27 日

馬鹿正直と悪賢者（上）〔立藤武助〕

若 葉 一

統計学専攻、ことに統計史を主とし資料蒐集に着手する。

三 月

馬鹿正直と悪賢者（下）〔立藤武助〕

若 葉 二

郷土学の理論

浪華の鏡 11 三一—三

葬列の入りみち

民間傳承 三一—七

四 月

〔編〕第一回布施市統計書

〔編〕第一回農家統計調査概要

戦死者顕彰碑銘

5 日

宮田忠造陸軍中佐の依頼により今次事変戦死者の碑文、漢文でかいた唯一のものである。

五 月

農家調査に就て〔立藤武助〕

浪華の鏡 5 三一—五

敦賀から宮津、橋立へと旅行。

六 月

ごろつきの道徳（一）

文芸部報 7 一

〔編〕昭和十二年工業調査概要

〔談〕乞食の経済と統計

大阪統計談話会 1 回 11 日

市町村統計の集計公表に就て（一）〔立藤武助〕

浪華の鏡 三一—六

文化調査の立案をしていさゝか学界につくす、松野竹雄と共に大阪統計談話会をつくる、同志に土井五六七、高田志磨太郎、岩城義朗、田住孝などがあつた。

七 月

市町村統計の集計公表に就て（二・完）〔立藤武助〕

浪華の鏡 三一—七

天保銭と韋駄天

〃 3 三一—七

〔編〕統計学文献 上

日本統計学書史略説

統計学文献（上）所収

〔編〕大阪統計談話会々報第一号

〔座〕統計及び統計学の意義を中心にして

大阪統計談話会々報 一

乞食の経済と統計

〃 2 一

〔講〕「古事記」解説

25 日より 29 日にわたり日大文芸部夏季講習会、毎夜二時間づゝ講義した。

八 月

布施市に於ける市民の文化生活の統計的觀察（予報）

布施市公報 4 二〇

この他、同公報及びその前身布施町報に若干ある。

〔編〕昭和十二年工業調査概要 布施 一一三

布施商工会議所発行機関誌、布施市公報より転載。

日本の統計学習(1) 呉氏「統計実話」〔御宮司好文〕

浪華の鏡1 三十八

人口問題研究会に入る。

九月

神の意志と人の心―ごろつきの道徳(二・未完)

文芸部報5 二

津田左右吉博士の「儒教の実践道徳」に就て

書物新潮1 一二一

日本の統計学書(2) 財部博士「ケトレーの研究」(一)

〔御宮司好文〕 浪華の鏡1 三十九

〔編〕統計学文献(上) 補遺

〔編〕大阪統計談話会々報第二号

〔座〕大量観察及び大量観察法に就いて

大阪統計談話会々報第二号

〔座〕大量の問題を中心として 〃 第二号

〔編〕昭和十三年版布施市勢要覧

新聞雑誌はどんなに普及してゐるか

布施市公報2 二一

ラジオの普及と文化生活 〃 二二

十月

日本の統計学書(2) 財部博士「ケトレーの研究」(二・完)

〔御宮司好文〕 〃 1 三一〇

日本の統計学書(3) 杉先生講演集〔御宮司好文〕

浪華の鏡 1 三一〇

生活程度指標測定に関する住居密度の問題

〃 7 三一〇

市町村に於ける統計公表の形式に就いて〔立藤武助〕

〃 7 三一〇

〔編〕大阪統計談話会々報第三号

十一月

〔編〕大阪統計談話会々報第四号

統計学史参考文献献題 大阪統計談話会々報第四号3

〔編〕大阪統計談話会々報第五号

統計的方法の基本的性格について 〃 第五号2

職分表章の社会性 〃 第五号5

〔座〕單位について 〃 第五号

〔談〕職分表章の社会性 大阪統計談話会5回

〔座〕「大量観察代用法」に就いて 浪華の鏡7 三一

日本の統計学書(4) 松崎博士「統計学汎論」〔御宮司好文〕

〃 1 三一

十二月

〔編〕大阪統計談話会々報第六号

Elderton; Premier of Statistics 大阪統計談話会々報第六号1

〔編〕大阪統計談話会々報・第一卷合本

権田保之助「民衆娯楽問題」 〃 2

商都大阪の葬式 上方(統冠婚葬祭号) 5 九六

口絵写真六葉

拾・綿入・寒暖計〔釈迢風〕 浪華の鏡 2 三一―二

日本の統計学書 (5) 横山氏「婚姻論」〔御宮司好文〕 〃 1 三一―二

日本の統計学書 (6) 「表紀提綱」〔御宮司好文〕 〃 1 三一―二

〔談〕日本法律生活の基礎概念 (一・未完)

布施市自治研究会 2 回

日本法律生活の基礎概念 布施市自治研究会報 2 二

統計学社に入社する。

昭和十四年 (二六歳) 1939 2599

一月

〔談〕中世日本に於ける統計イデオロギーの發生に關する民俗学的考察の計畫について 大阪統計談話会第7回例会

一人前のはたらき〔釈迢風〕 浪華の鏡 4 四―一

日本の統計学書 (7) 横山氏「統計をしへ草」〔御宮司好文〕 〃 1 四―一

〔座〕表式調査論 〃 四―一

二月

單位 文芸部報 4 三

農村の規範と都市の犯罪〔規矩純勢〕

浪華の鏡 8 四―二

統計学と統計実務 (一・未完)〔立藤武助〕 〃 3 四―二

日本の統計学書 (8) 花房博士「統計講演筆記」〔御宮司好文〕 〃 1 四―二

日本の統計学書 (9) 細野氏「農商務統計講義」〔御宮司好文〕 〃 1 四―二

福子〔釈迢風〕 〃 3 四―二

元旦試筆。

〔著〕布施市に於ける中小商店の実情

三月

職業紹介統計史覚書 (一) 浪華の鏡 四―三

道德意識の地方色 (一)〔規矩純勢〕 〃 四―三

日本の統計学書 (10) 高野博士「社会統計学史研究」

〔御宮司好文〕 〃 1 四―三

日本の統計学書 (11) 細川氏編「日本帝國形勢総覽」

1 四―三

〔編〕第二回布施市統計書

〔談〕是論 大阪統計談話会第8回例会

日大専門学校商科を卒業する、統計学前史をかきあげ、これが一生のしごとのもといになるとおもった、同窓多く青年学校の教師になり、わたしももう少しでなるところであつた。

四月

〔編〕統計研究 第二卷第一号

大阪統計談話会々報を改題したもの、以後自然廃刊となる。

是論 第一部発生論

統計研究 6 二一

三八政〔釈迢風〕

浪華の鏡 2 四一四

日本の統計学書 (12) 呉氏訳「社会統計学」〔御宮司好文〕

職業紹介統計史覚書 (二)

〃 1 四一四

職業紹介統計史覚書 (二)

〃 四一四

月俸四十円になる。

五月

百年・大阪の人口

上方 1 一〇一

上方百号記念として百人随筆集を出したその第二輯にもとめられていた。

職業紹介統計史覚書 (三)

浪華の鏡 四一五

道德意識の地方色 (二・完)〔規矩純勢〕

〃 四一五

日本の統計学書 (13) 横山氏「統計通論」〔御宮司好文〕

〃 1 四一五

〃 (14) 二階堂「正分量的ニ觀察シタル脚氣」〔御宮司好文〕

〃 1 四一五

六月

統計史から見た物の國勢調査

浪華の鏡 4 四一六

日本の統計学書 (15) 財部博士「國勢調査問題講話」

日本の統計学書 (16・完) 岡崎博士「國勢調査論」

〃 1 四一六

(著)布施市住民の生活 (文化)

〃 1 四一六

(談)幕末維新期の統計思想

大阪統計談話会第10回例会

七月

中世日本に於ける統計思想の発生及び統計学の成立に至る序史 (一)

浪華の鏡 11 四一七

日本統計稀觀書解題 (一) 萬國政表・西洋各國錢穀出納表

〃 6 四一七

郡菊之助教授の「統計学發達史」に就いて

書物新潮 2 一三〇

(編)昭和十三年農家統計調査概要

(著)現代文化と統計学

八月

職分表章の社会性 (一)

統計学雜誌 六三八

中世日本に於ける統計思想の発生及び統計学の成立に至る序史 (二)

浪華の鏡 14 四一八

日本統計稀觀書解題 (二) 海外國勢便覽・萬國名數記・辛未政表

〃 10 四一八

数の魔力〔釈迢風〕

〃 四一八

(編)昭和十三年工業調査概要

臨時國勢調査にて奔走。

九月

職分表章の社会性(二・完) 統計学雑誌 六三九

中世日本に於ける統計思想の発生及び統計学の成立に至る序史(三)

浪華の鏡12 四一九

日本統計稀観書解題(三) 第二統計年鑑・日本帝國形勢総覽

〃 7 四一九

開国文化と統計書

〃 8 四一九

民間傳承1 五一一

布施市公報 四六

最近生計費指數の変動

(著) 会社資本の分析

(著) 統計談叢

月俸四十七円になる、丸山博、本荘茂と相しる。

十月 通勤労働者の交通状況 布施市公報 四七

中世日本に於ける統計思想の発生及び統計学の成立に至る序史(四)

浪華の鏡17 四一〇

日本統計稀観書解題(四) 萬國國力比較・日本帝國の富力・世界國

勢要覽 〃 10 四一〇

七つ変化〔釈道風〕 〃 1 四一〇

二日に布施市役所を辞職し、十日に弘済会調査係に入った、「七つ変化」はこのときの挨拶状である。

十一月 中世日本に於ける統計思想の発生及び統計学の成立に至る序史(五)

浪華の鏡16 四一一

日本統計稀観書解題(五) 萬國対照年鑑

〃 3 四一一

産業革命と統計書 〃 7 四一一

(談) 官庁統計のからくり 社会政策研究会例会 29日

社会政策研究会に入る、孝橋正一、井上正雄と相しる。杉栄、藤田

敬三、梶原三郎、難波紋吉の諸先生にあふ。

十二月

官庁統計のからくり 協調会大阪支所 七

中世日本に於ける統計思想の発生及び統計学の成立に至る序史(六)

浪華の鏡17 四一二

日本統計稀観書解題(六) 兵庫県揖保郡是並町村是

明治統計書の社会性 〃 3 四一二

(著) 日本統計稀観書解題 菊判 77頁 25日発行

七月以後連載の解題、松野竹雄執筆の三部と合せて、附録として

解説三編を附した合本。意外の好評を博した。

杉栄、丸山、松野などをメンバーにして統計学研究会をつくる。

昭和十五年 (二七歳) 1940 2600

一月 中世日本に於ける統計思想の発生及び統計学の成立に至る

序史(七・完) 浪華の鏡18 五一一

小島勝治文献目録 二七

貧困原因の調査について〔本莊茂〕 社会福利 15 二四—一

〔談〕乳児死亡統計論史の概要について

社会統計学会第三回例会 24日

二月

〔編〕社会事業論叢 第一巻第一号 菊判 86頁 10日発行

慈恵統計に関する問題 社会事業論叢 9 一—一

最近に於ける貧困層の動向 (二) 〃 6 一—一

美濃口時次郎「人的資源論」〔本莊茂〕

〃 2 一—一

救護費増額について 〃 4 一—一

最近のわが統計学〔御宮司好文〕 浪華の鏡 5 五—二

商業と簿記の教員免状が下付された、なんの役にもたない紙きれ

である、宗藤圭三先生にあふ、また森喜一、風早八十二、牧哲男、

三浦かつみなど、相しる。

三月

穂積陳重博士の人口調査論 浪華の鏡 9 五—三

四月

社会事業に於ける都市と農村〔中石清一〕

大大阪 3 一六四

ケトレー「人間に就いて 上巻」 書物新潮 1 一三八

都市住宅に於ける若干の問題 協調会大阪 支所月報 2 一一

統計は愚弄する鏡 浪華の鏡 5 五—四

〔編〕社会事業論叢 第一巻第二号 菊判 108頁 20日発行

明治十年代の教育統計 社会事業論叢 18 一—二

転換期社会事業の実相〔本莊茂〕 〃 15 一—二

最近に於ける貧困層の動向 (二) 〃 5 一—二

不民児童問題の対策と調査 〃 3 一—二

中央社会事業協会「日本社会事業年鑑」 社会事業論叢 1 一—二

日本労働科学研究所「日本社会衛生年鑑」 〃 1 一—二

日本統計学会に入る、郡菊之助、豊崎稔先生にあふ、統計学会への

入会は杉栄、丸山博の紹介による、この頃浅香千速先生をうしな

ふ、統計学会研究会を社会統計学会とあらためる。

五月

〔談〕大阪市市民調査について 社会統計学会第七回例会 8日

社会事業統計の基礎理論 浪華の鏡 19 五—五

〔著〕第二一回弘済会年報 (昭和十五年版) 菊判 168頁 1日発行

〔編〕社会事業論叢 第一巻第三号 菊判 78頁 10日発行

今議會を通過したる厚生立法 社会事業論叢 8 一—三

〔訳〕中國における貧窮問題 〃 4 一—三

上海特別市社会局「社会月刊」第二巻第六号所載、聞紹・中國貧

窮問題の邦譯。

柳田國男氏の「大家族と小家族」 〃 2 一—三

農事調査について 浪華の鏡 7 五—六

小島勝治氏について

大橋隆憲著『日本の統計学』（法律文化社）の第一頁は、こんなまえがきで始まっている。

「この本を故・小倉金之助先生にみせるなら先生はこういうにちがいない。『なんだこの本は、特権官僚学者どもの御用統計学の系譜を示めているにすぎないではないか。国民大衆と共に、第一線の仕事をした民間統計家、たとえば小島勝治などの系譜がぬけおちているではないか』と。」

この資料は、その小島勝治の文献目録であるが、読まれたように、これは他人が作成したのではなく、本人自編のものである。小島はこれを満二六歳の夏（一九四〇年）にまとめ上げ、『小島勝治著作目録』と名づけていたことをこわっておこう。

この目録の原稿は、十行・二五字詰の原稿用紙の一マスに二字づつ楷書で綴った一〇八枚に及ぶものである。私達はこの原稿を、彼が遺した「本棚一つ分」ほどのメモや日記類や、論文の別刷りの束の中から発見したのであるが、この大きな「小島文献」は、終戦直後、その散逸をおそれて、整理され京大経済学部図書館に収納されたものと重複している資料及び日記類であって、つまり全体の「小島文献」の一部であって、京大の大橋隆憲教授、阪大の丸山博教授、金沢経済大の鈴木宗憲教授、華頂短大の吹田盛徳教授、その他の諸先生方の御厚意によって私共の研究室に、現在保管されているものである。三十年前

の原稿を、ようやく活字にすることができたのは、ひとえに前記の諸先生方の学恩によるものであり、厚くお礼を申し上げる。

さて、小島勝治（こじま・かつじ 1914～1944）は、この文献目録からも、およそどんな人物であったかを想像できるであろうが、さらに大橋教授の表現を借りれば、戦前の官僚政治機構下において、「権力と金力に迎合せず、真実をきわめ、真実を語り」学問の自由を護らんとしたたかった数少ない在野研究者の一人であったといえる。

ところが、現在、小島勝治という名前は忘れられようとしているし、彼ののこした論稿に溢れる学問的態度を再評価しようとする試みも、極く少数の先学によって細々と続けられているに過ぎない。私達は、このかすかなともしびをかきたてる努力を重ねたいと考えている。

民俗学、統計学、社会事業理論と、多岐にわたる分野に、ほとんど独学で、独創的な見解を発表し続け、戦病死と伝えられる死によって、若くして世を去った、小島勝治と、彼の研究業績を、どう正しく評価していくかについて、各界の若い研究者の方々の御協力をお願いしたいとおもう。

（上田千秋）